草ひき

今様上方落語（六）

田辺聖子

絵 水木しげる

週刊誌や夕刊新聞にはよく、穴場さがし、なんてございます。何をさがすか、というと、紳士のお遊びがその主要なるものであるらしい。

いかにも、さもありそうに書かれてあります。

その場へいったら、誰でもありつけるように思わせるところが、ミソ。見もしらぬ土地を、あれか、これか、想像するたのしみがあります。その店、そこにいる女の子、その値段を思いくらべ、さまざまに心を遊ばせるたのしみ、べつにそのガイドによって実地にこころみるというのではなくても、いいらしい。

それゆえ、まだいったことのない遠方の土地の方が、いかにも空想をそそられて、たのしいそうでございます。

一人の男、ありけり。

これも世の常の男なみに、ピンクガイドをよむのが好きですが、会社の帰りの電車の中で、人の捨てた夕刊新聞に目をあてているうち、ふと目に止まった一節。

近年、〇〇町に人妻の売春があるらしい、

とある。〇〇町というのは、男のすむ郊外の町の名で、何の変哲もない新興住宅街、背中の山も、いま削りとられて、分譲宅地がひろがっているといった、どこにでもある郊外です。

記事によれば、駅のタクシーに乗って、ソレとなく当ってみると、心利いた運転手が、二つ返事でつけてくれるという。マンションの何階かへ上り、コンコンとドアを叩くと、目の高さの覗き窓からあだっぽい目がウインクして……。

男がそこまで読んだとき、電車が〇〇町へ停まったので、あわてて降りました、これは人妻のマンションへいくためではなく、ここから更にバスにのり、〇〇町に近年乱立している私営のアパートのわが家へ帰るためでございます。

しかし、〇〇町にはほんまに売春する人妻があるんやろうかと男はまことに複雑なる、心境。

ワクワクして、うれしくなってくる。建売住宅もマンションも、〇〇町にはいくらでも出来つつあり、住人も多いが、みなとりすました顔をした女や男ばかり、「あだっぽい目でウインク」するような人妻がいるとも思えない。ないが、書いてあるかぎり、本当かもしれない。

火のない所に煙は立たず、まさか、あてずっぽうに、〇〇町の名をあげたわけではなかろう。

誰かが経験したか、実地踏査、探険をやったのではなかろうか。

家へ帰るなり、男は女房をつかまえて、

「あのなあ、このへんの奥さん、みな、ちゃんとしとるか、へんなん、おらへんか」

とつい、聞いてみる。

女房というのは、これはいつも不機嫌で、男を叱ってばかりいる女であります。何を叱るかというと、第一に稼ぎがわ

るい。それから、家を建てるという努力が足らん。いつまでも私営のせまいアパートで、満足しているという、その根性があかん、歯磨きチューブのフタをしめ忘れる、日曜の朝寝、夜のテレビの見すぎ、子供の教育に不熱心、食事のときに新聞よむ、ズボンの裾とポケットロをひどくいたませる。そのほか、いろんなことをひっきりなし、たえまなしに、叱るのであります。

ですから男が、そうきくと、

「何の話です?」

「いや、新聞にのったった」

男が記事を話すや否や、

「けったいなこといわんといて。パパってどうしてそう、エッチなの! そんなバカなことあるわけないでしょう。それよか、今夜は幼稚園の申込みに並ばないといけないのよ。先着順なんですよ、早く早く!」

と追い出され、男はマゴマゴして

「いつまで並ぶねん、札でもくれるのか」

「朝までですよ、朝、校門があいたらいっぺんにとびこむのよ」

「徹夜するのか」

「当り前でしょ、毛布もっていって、しゃがんでて下さい」

「しかし……」

「パパ、子供、可愛いことないのん?」

男は毛布をもって出かけたのでありますが、どうも気になってならないのは、穴場さがしのガイドで、みちみち、どのへんであろうかと考えている。

しかし、その見当はつかなくとも、タクシーの運転手が知っているということですから、任せればいいのであるが、「それとなく当る」というのは、どういう風に当ればいいのであろうか、

「このへんに、人妻売春はおまへんか」

とも聞けんやろうし、

「ほら、兄ちゃん、知ってるやろ、例のマンション……」

といったって、全部の運転手が知ってるとは限らない、不得要領な押し問答があって、トドのつまり、けったいな客や と乗車拒否されるのがおち、

「ムゥ、穴場さがしをさがすのもむつかしいもんやなあ」

と男はためいきつきつき、夜道を幼稚園さしていそぐ。

こういうと、男はいかにも好色そうでありますが、べつにとりたててそうというのではなく、好奇心というものであります。かつ子供の幼稚園がどうのこうのということも、人なみに子ぼんのうで気にはしている。気になるから、徹夜で入園申込みをしようというので、それはそれで真剣ですが、しかし〇〇町に穴場あり、といわれると好奇心むらむらとなるのも、どうしようもありません。

あんまり考えこんで歩いていたので、道をまちがえてしま

った。と、そこへタクシーが走ってまいりまして男は道をよける。

タクシーが止まりました。止めたのではない、向うが止めよった。

中年の運転手が窓をあけて、

「大将、いきまほか」

というのであります。

「何の話や」

「いえ、おもしろいとこ知ってますねんけど、案内しまひょか、いうてまんねん」

男は思わず、車にすりより、

「それ、何か、マンションの」

「さいダ」

「あんた、誰にもそんなとこ、連れてんのかいな」

「誰にもいわしまへん、遊びたいなあ、おもろいとこみたいなあ、思てはるお客さんはすぐわかりますよって」

「わかるか」

「背中に書いてまんがな」

男は運転手があけてくれたので車にのりこむ。車は、新興住宅街らしき、まっ暗の夜道を走りまわって、マンションにつきます。見たこともない所、小ぢんまりした可愛らしいマンションです。車を下りてタクシー代を払うあいだ、マンションの窓から誰かのぞいているかんじ、

「三階ですわ、ほな」

と運転手がいって走り去りますと男は急に心細くなりました。

ガイドや穴場さがしは、読んでこそ面白いので、実地に当ると、どうも面白くない、あてはずれが多い。かつ、不安でもある。

しかし、ここまで来てしまうと仕方ない、ドアをコンコンと叩くと、「あだっぽい目」がのぞくはずなのに、ドアの隅の下の方で、何だかチロチロしている。「あだっぽい目」で、ドアの下からのぞいているのかしらん。そのうち、クンクン、なんて声がきこえ、「あだっぽい鼻」で匂いもかいで検討しているのかもしれません。

むりもない、一見の客でありますから、おなじみさんとはちがう、前以ってイロイロ、向うでもしらべてよりわける必要があるかもしれない。

そのうちドアがあきまして、「どうぞ」という。声はいかにも「あだっぽい」声、また、

「ようこそ」

とあだっぽくいう、しかし、一向に姿が見えません。

「何をきょろきょろしてるの、坐って」

ふと見ると、白い犬がじゅうたんに寝そべって、しきりに男を見てシッポを振っております。

「いらっしゃい」

犬がものをいう。男は仰天いたしました。

「犬だってしゃべるわよ、あたしおしゃべりなのよ」
犬はしなよく耳をふるい、男のひざに手をかけ——前肢というべきか、
「あんた、遊びに来たんでしょ、あーそびーましょ」
「犬とあそぶのかいな」
「あら、失礼ね」
犬は横目を使って、あだっぽく笑い、
「うーんとサービスするわよーん」
とちぎれるばかりシッポをふる。すると何となく、女にみえてくるからフシギであります。
「そもそも、この地球にたくさんのイキモノがいるのは、なぜかというと、みーんな仲よくしなさいという神サマのお心よ。トリ、ケモノ、虫、魚。人間だって、みんなと仲よくしなくちゃ」
と犬は、シッポを振りながら、キチンから酒と氷をはこんでくる。鼻づらでワゴンを押したりいたしまして、
「人間だからっていばってること、ないじゃん。みんなで仲よくすりゃ、いいのよ」
と酒を両手で、——両前肢でついでくれる。
「おサルのおくさんや、ネコのおくさんがいてもいいんじゃない？　あんた、何が一ばん好き？」
「そうやなあ、犬が一ばんええかもしれへん」
犬好きの男はそう答えました。子供のころ犬を飼ったことがございまして、犬の匂いや手ざわり、鳴き声、それに、とびついてくるときの体重、抱き上げたときの前肢のおきかた、みんな記憶にあるので、なつかしく、かわいい。犬をおくさんにしてるのも、いいかもしれない。犬のおくさんなら、テレビの見すぎも、ズボンの裾をいためるのも、文句いうまい。
子供の幼稚園入園申込みを徹夜で並べ、ともいわないだろう。
「あらほんと。うれしいわ」
と犬は、前肢をちょんと、「お手」の恰好で男にあずけて、色っぽい目で、
「じゃァ、ずっとここにいてくれない？　あたしも、何だか、あんたが好きになっちゃった。離したくないんだもーん」
と飛び上って男の胸にすがりつき、ちゅっとキスをいたしまして、ウインクする。犬の目は丸くって黒々と濡れていて、たいそうかわいらしいものですが、それが情緒ありげにパチパチするので、かわいらしくて男はもう有頂天、それにしても男からみても、この犬の種類はわからん、
「あたし、あいのこなの」
「つまり、雑種いうことやねんなあ」
雑種、雑犬にもまた、何ともいえん可愛らしさのあるもので、血統書つきの犬はそれなりに、いいものなんでしょうが、裏町そだちながら、人にかわいがられて育った犬らしく、悪気はみえない。

「ねえ、おくさんにしてえー」
なんてシッポをふられると、かわいくてなりません。男はとうとう、その家へいついてしまいました。
「ほんというと、このへん、いろんな動物をおくさんにしてる人間、多いわよ」
と犬はいい、見わたしてみると、向いどなりは、猫をおくさんにしております。この猫は美事な黒猫で、ツヤツヤと光った毛なみの、栄養のよさそうなヤツ、人間の男はいつもふところに入れてあるき、大事にして赤いざぶとんに坐らせておりますが、猫は日がな一日、わが身を舐めてきれいにするのにかかっており、ときどき、甘ったれ声を出して人間にぶらさがり、人間は猫なで声で、
「ミイや、ミイや」
などと呼ぶ。そこへくると、男の犬妻の方がずっとかいがいしい。
リボンを結んだ耳を風にそよがせ、口にカゴをくわえて市場へ買物に行き、肉や野菜を買出しにいって自分で台所に立ったりする。洗濯機も口で廻し、世帯やつれも見せず、男が外へいくときは、足もとにまつわりついて一緒にあるく。
寝るときは男の胸元に丸くなってたいそう暖かで、アンカを抱いているよう、
「ねえ、八犬伝のお話知ってる？」
なんて耳もとでささやきます。
「知ってる、知ってる、昔よんだ」
「お姫さまと犬が夫婦になるのよ、昔っからあるんだわ、あたしたちがはじめてじゃないんだわ」
なんていいます。
男も考えてみて、昔の人間の女房よりはるかにいい感じ、犬のいう如く、なんで人間と犬と一緒になったらあかんねん、昔から、キツネが女の姿をして人間にあいに来たとか、結婚した、いう話はなんぼもあるやないか、と思ったりいたします。男の場合は、犬がべつに人間の姿をとってもらわなくても、情を通ずるときはしぜんと感応して、人間の女以上にぴったりきました。思うに、たぶん犬と、心がぴったりしたからとちがうかしらん、それに犬だと、上へこいの、下へこいの、やれ早いの、おそいの、と文句いうこともない。いつも二人、いや、一匹と一人は、じっと抱きあって、そのまま気持よくぐっすり眠り、やがて朝を迎えると、犬は身がるくとび上って、
「あら、もう、こんな時間！　ねすごしちゃった、ごめんなさいね」
などと、いそいで朝食をそろえてくれる。後肢だけで立って、男に、靴べらだ、新聞だと渡してくれる、そのマメマメしい可愛らしさに、男はまたあともどりいたしまして、犬も、
「あら、また？……いやァだ、おくれないの？」
などといいながら、いそいそとドアのキイをさしにいった

りいたしまして、男のあとから犬が、こけつまろびつ、というふうにうれしそうについてはいり、
「はよ、はよ、もう時間ない」
などといいながら、またむつみ合ったりする、男にとっては何ともうれしいたのしい夢のようなくらしでございます。
こんなふうにずうっといけるなら極楽とちゃうか、と男は思いました。昔の人間妻とのくらしもそうですが、ホカのイキモノを女房にしとる奴、猫妻もそうですが、九官鳥を女房に持っとる奴も、ええかげんなもの、女房は一日ペチャクチャとしゃべりちらし、人間の亭主はうんざりしておりますが、それでも人間妻よりはよいらしい。
キツネを女房にしとる奴、これは、仲がよさそうですが、女房が時々、木の葉をお札に変えて、買物をして来るのでかなわんとこぼしておりました。
また、タヌキを女房にしとる奴は、エリザベス・テーラーやオードリー・ヘップバーンやアグネス・チャンに化けてくれて、毎夜、結構たのしんどるらしい。しかしながら、あけ方見ると、寝床ではやっぱりタヌキの恰好になっていて、興ざめとのこと。男にしてみれば、ころころ太ってまっ白い、ムクムクした毛の犬が一ばんいい。ぎゅっと抱いて寝ていますと、浮世の苦労も忘れる心地でございます。
しかし、浦島太郎と同じで、男というものは、つねに、里心がつくことになっている。海幸・山幸のお話でも、必らず、男は、里心つく。
手をつくし、趣向をこらして乙姫様が接待したとて、やがていつかは、生まれ故郷を思い出す。帰巣本能が目ざめてくるのです。これは、人間の男の、「ないものねだり」という性癖のせいかもしれません。
ともかく男は、捨ててきた妻や子や、私営アパートの小さな部屋を思い出した。どないしとるやろ、幼稚園の入園申込みにいってそのまま蒸発した思て、悲しんどるのとちがうかしらん。犬には申しませんが、男はそんなことを、内々、考えたりしている。そんなある日、男は犬を連れて町をあるいておりました。
例によって、犬はあと先になり、じゃれてあるく。
しかし、人と人がでれでれして歩いておりましたら目立ちますが、人と犬がキスしたり抱きついて歩いても、だれも目をそばだてるものもございません。
ふと見ると、車道をへだてた向うに、やはり、そうやってふざけながらあるいている人と犬がございまして、こっちの方は、人間の女と、犬は堂々とした大きなボクサーであります。
女をひと目みて、男はあっと叫びました。
捨ててきた女房ではありませんか。
「あれは」
と男がびっくりして目をこらしますと、犬が、
「どうしたの?」

と男の視線をたどり、
「あら、あれ、知ってる人?」
「まあ、ね」
「あの人も、犬をご亭主にしてるのね」
と犬はうれしそうにいい、ほんまかいな、と男は何が何やら、ややこしくて、あたまが混乱いたしましたが、しかし女房はごく明るく屈託なげなようすで、犬といちゃついておりまして、これやったら、あんがい、元気よう、いっとんのちゃうか。
べつに亭主が帰らんでも、そこはそこで、女は生活力がつよいものですから何とか、恰好つけとんのにちがいない。
それに見れば、あの大型のボクサー犬、いかにも生活力も、あっちの方も充分エネルギーのありそうな、力づよい犬、男らしい犬であります。
男が、人間妻よりも犬妻の方に魅力を感じている如く、女房も、人間亭主よりも、犬亭の方にひかれているのかもしれへん。
しかしながら、男は、以心伝心で情を通ずるけれども、女は、どうやって通じとるんやろか、と思わず男はじっと振りかえり、
「やあねえ。……どうしたの?」
と犬にズボンの端をひっぱられる。
「やっぱり、人間の女がいい?」
「ちゃうちゃう、ぼくは犬が一ばんええ」
と抱き上げてやりますと、
「あら、くすぐったい、人が見てるじゃないの、バカ。いやーん。あ。そこいや……」
すこし省きます。
さて、こうやってたのしく暮らしておりましたが、好事魔多く、犬は、体をこわしまして、お医者に診てもらうと、妊娠だという。そこで、男が抱いて産犬科へまいりましたが、あまり経過がよろしくなく、あえなく、みまかったのでございます。
男の悲しみは、いうまでもございません。
あほらしくて、生きてる気もいたしません。といって、元の女房の所へ帰る気には、さらさらならぬ。
日がな一日、犬を埋めた墓の前で、しょんぼりしている。考えてみると、人間の寿命と犬の寿命は、えらいちがい、……どうしても犬の方が先に死ぬことになります。それはわかっているのですが、男は、犬と暮らしたたのしい日々を忘れかねて、いつまでも涙ぐんでおります。
近所の人がみかねたとみえまして、
「まあ、ちっと早いかもしらんけど、おちついたら、再婚しはったらどないですか」
などとすすめるのは、タヌキを女房にしている人、
「うちのよめはんの姪に、かわいらしいタヌキがおりまっけど、どないですか」
男は、いかにかわいいタヌキであろうとも、いまさらエリザ

ベス・テーラーや、ヘップバーンに化けてもろて寝ようとは思わん、もしできるならば、生前の愛くるしかった、あの白犬に化けてほしいけど、そんなこというたら、タヌキ、怒るやろ。タヌキの乙女心にもプライド傷つけられた、思うやろ。

「うちのよめはんの知り合いに、ワシがおるんやけど、どうですか」

といったのは、九官鳥を女房にしている人、

「ワシとは何です、あの鳥のワシかいな」

「そうそう、これも未亡人で一人ぐらしですが、ほん気ィのええ、下町そだちの女ワシですわ」

「ワシなんて、こわいがな」

「いや、べつにこわいことあらへん。ごく気立てのええオナゴで、まあ、体はごついけど、よう働きまっせ」

男は、鳥などを女房にするつもりはなかったのでありますが、そのワシが、たいへんな大ワシ、翼をひろげると、ゆうに二メートルは越そうかという大きさで、たくましく力づよく、しかも男をその背中にのせて、かるがると、飛べるというので、いたく心をそそられました。

「ほんまかいな、それは」

「ほんまだす。いっぺん、乗ってお見やすか」

と、ワシは申しました。このワシは、亡妻の犬よりもっと年上らしく、おちついており、かつ、大阪弁を使って、まるで男は、おふくろか、おばさんに頼ってる心地、それはそれで、中々、ええものです。

「よっしゃ、ほんなら一つたのむわ」

と男はいい、ワシの背中に乗りました。

「首すじの毛ェ、しっかりつかんどいとくなはれな。落ちはったら、あかんさかい」

「大丈夫や」

「ほな、いきまっせ」

と、体はでかくても、さすが女、ワシはやさしく声をかけて、羽ばたきます。

ふわーッ、

と体が宙に浮きました。

「ヒャー、浮いた浮いた」

ぐんぐん、体は天空たかく昇ってゆきます。

「イヤー、えらいながめやなァ」

「あれが大阪湾だすな」

「六甲山はあれやな」

「お天気ええさかい、きれいにみえますやろ」

「うーん、こら絶景やなあ。——山を崩して家をどんどんたてとるが、こない開発すすんでは、どもならんなあ」

「ほんまに。上からみると、ようわかりますな。こない、木ィ伐ってしまわれたら、ワテら、住みにくうていけまへん」

「そういうこっちゃな。こんどはこっちへ飛んでんか」

「淡路島が見えますやろ」

「ひととびやなあ。鳴門の渦までみえてきた——あんた、重たいこと、ないか」
「いいえ。あんさんなんか、かるいもんだす」
「重となったら、いうてや」
「まあ、おやさしい旦さんや。ワテ、こんなやさしい男の人、知りまへん」
ワシは男を背中に乗せてとびながら、涙こぼしよった。
「あんた、すると苦労したと見えるな」
「苦労させられました、前の亭主がわるい男で、飲む打つ、買うでしたわ」
「亭主もワシかいな」
「いえ、クジラです」
「何でまた、クジラなんか亭主にしてん」
「親のきめたいいなずけやったさかい、しょうまへん。ワテが意見すると、ぷっとふくれて潮を吹き上げたりしてましたけど」
話しながらいくほどに、四国をひととび、瀬戸内海からまた、戻ってまいりました。
「しかし、こない、高い所をゆうゆうととんで、広々とくらしとったら、気ィもこせこせせんで、よろしやろなァ」
「いいえ、そやかて、ワテはやっぱり女、男はんがいやはらんと、心ぼそうて、なさけないですわ」
「そんなもんかいなあ」
「やっぱり、いろいろ、いうにいえん、辛いこともおますし、なあ」
きくうちに、男は、このおばはんワシが、かわいくなってきました。
「男はんが居らんと、オナゴは、あきまへん」
という大ワシの言葉に打たれたせいでしょうか。
だいたい、こんなことをいうやつ、人間のオナゴには、今日びあんまり、いよらん。
こんなに大きな図体をして、二メートルの翼をひろげ、男をのせて四国まで往復しながら、そういう、いじらしい、やさしいことをいう心根に、ほだされたのでございます。
「なあ、これも縁のもんや、ぼくも、ヤモメやし、あんたもヤモメ、ヤモメどうしで一緒にならへんか」
「ほんまでっか」
「ほんまやがな」
「うれしおす、ワテ捨てんと、おいとくれやすな」
「あたり前やがな」
男は、ワシの耳に口をつけて何やら、ごちょごちょ。
「ま、こんなとこで、だすか。三々九度の盃もすまへんのに」
「どっちが先でもかめへんがな」
「ま、はずかしい。人サンが下から見てはりますがな」
「こんなとこまで見えるかい」
男が何をいたしましたのか、ワシの体は大ゆれにゆれて、

「あ、あッ」
というたびに、スーッと下へさがる。
「おいおい、たのむで」
「そうかて、旦さんが……あ、あッ、どないしょう、まあ、ええわァ……うわ」
などと、ワシは身も世もないさまで呻いておりますと、また、ズ、ズーと高度が下る。
そのうち、男もワシも夢中になっておりますうち、どしーん！　とすごいショック。
恍惚のワシが羽ばたきを忘れ、天空から墜落したのでございます。
ワシは即死。
男はふしぎに一命をとりとめて、泣く泣く、ワシを葬ってやりました。
「なんちゅう、ぼくは、女房運のわるい男やろ」
とすすり泣きながら、ワシの墓を、犬の墓に並べて建てました。
今思えば、犬もよかったが、ワシも、なかなかの女っぷりであった。
女というのは、力がつよくて、そのくせ、男を大事にするという気性の女がのぞましい。あのワシは、女金時(きんとき)か、巴御前(ともえごぜん)、というような腕力のある女なのに、心がやさしく、しおらしかった。
ああいう女と添いとげたかったのに、どこまで、ついてないのだ。かわいそうに、大空を飛んでる最中に、おかしな心得ちがいをおこしたばかりに、死なせてしまった。
「なんまいだぶ
なんまいだぶ」
男は泣く泣く、墓石に手を合せ、
「成仏してや」
と石に水をそそぎ、花を活け、線香を立てました。
「それにしても、この、草の生えてること。かわいそうに、掃除したるさかい、ちょっとまっとりや」
と男は生ける妻にいうごとく口の中でつぶやき、墓のそばの草をひきぬこうといたしました。
「えらい、かたい草やな。ちぎれて、強い雑草やな、うーむ、うーむ」
しきりにひっぱっておりますと、男は、
ばちん！
と手をひっぱたかれた。
「あんた、何すんのよ！」
ふと、目ざめれば女房が目の前にいます。
犬でもワシでもない、人間の女房、
「何してんのよ、ヒトの大事なとこの毛ェむしったりして！——会社におくれるわよ、さっさと起きなさい！」
（第六話おわり）